

自閉症児家族と大学生ら触れ合う



子育ての苦労や楽しさなど、保護者の「生の声」に学生たちは耳を傾けた



2日目、学校近くの海辺で遊ぶ児童と大学生。随分と打ち解けた様子だった

筑波大学附属久里浜特別支援学校（斎藤豊校長）は8月23、24日に、自閉症児の家族と大学生らが交流する、サマーキャンプを実施した。学生らが子どもと直接触れ合う場になった他、家族同士での交流の機会にもなった。

PTAの要望で実現

筑波大学附属久里浜特別支援学校は神奈川県横浜須賀市に位置し、国立特別支援教育総合研究所と隣接している。幼稚園から小学部まであり、自閉症の子どもたちが通う。

サマーキャンプは今回が初めての試みで、同校PTAからの要望で実現した。PTAが筑波大学学長との懇談会の中で、「自閉症の子と筑波大の子との交流を」「将来教員になった時の役に立てば」という意見

筑波大学附属久里浜特別支援学校「サマーキャンプ」

接し方学び、子どもと遊ぶ

学生たち 保護者の悩みにも耳傾け

が上ったのだという。筑波大から1〜4年生10人、大学院生2人が参加した。特別支援学校から大学に募集をかけたところ、教

学生たちは学校に着くと早速、自閉症についてのレクチャーを受けた。幼稚園の石川千尋主事が、自閉症の子とも接するときのポイントを説明した。

石川主事の大切なのは、好きなことや苦手なことを理解しようとする姿勢。『好きなことで一緒に遊ぶことで、他人と関わることに興味を持たせる』といった話を、学生はメモを取りながら真剣に聞いていた。

参加者それぞれ、得るもの多く

サマーキャンプを主導した工藤久美副校長は、「学生たちは最初緊張した様子だった。自閉症児と関わったことのない学生もいたが、徐々に子どもたちと関係をつくれていた。教員による触れ合い方にフォーカスしたレクチャーや、子育ての悩みを家族から生の声で聞いたことは、いい経験になったのではないかと。学生たちが自ら考えて子どもたちと接してくれて、2日間子どもが仲良くなったと、家族からも好評だった」と言う。

「進行の都合上、予定外の待ち時間が30分ほど生じました。その時に学生が自発的に子どもとボール遊びを始め、その輪が広が

する」「異性の場合、外出先でのトイレが大変」といったことが上がると、学生は興味深そうに聞いていた。同時に「できなかったことができるように喜びたい。地域のボランティア団体がヤギ2匹を学校に連れてきた。触れ合い方について人形でレクチャーを受けた後、実際に触れ合い、餌をあげるなどした。海やヤギとの触れ合いで、家族と学生らが記念撮影。子どもたちはその写真を切り貼りして、絵を描いたり、シールを貼ったりとデコレーションした。できた作品はラミネート加工し、家族と学生らが記念品として持ち帰った。

副校長。「次回があれば、保護者や学生が準備段階から関わられるようなイベントにしたい」と話した。筑波大学大学院1年の中村友彦さんは、「子どもたちの家庭での様子を家族本人から聞くことができたのは貴重な体験だった」と振り返る。

別の大学で経済学を学んでいるが、教育実習で行った特別支援学校での活動に魅力を感じ、特別支援教育を学ぶために大学院に進学。自閉症を専門にしたいと考えているため、サマーキャンプへの参加を決めた。

日本教育新聞
17面に掲載

令和7年9月8日発行

本記事は、日本教育新聞社から掲載許可を得ています。記事の著作権は、日本教育新聞社に帰属します。記事の無断での転載はご遠慮ください。